

園部藩小出氏の菩提寺

徳雲寺



徳雲寺はＪＲ園部駅の裏側、園部町小山東町の東南にある塩田山麓にあります。至徳２年（１３８５）小山村の豪族莊林氏によって創建されたといわれ、莊林氏の菩提寺でありましたが、園部藩の成立にともない、小出氏の菩提寺となりました。徳雲寺は寺格も高く、末寺は４２ヶ寺有したといえます。小出吉親はじめ歴代藩主の画像が保存されているといえます。莊林氏は徳雲寺だけでなく、春日神社を天喜２年（１０５４）に創建したといわれ、天和３年（１６８３）に園部駅裏の現在地に移転されたといえます。徳雲寺や春日神社の創建に関わったとされる莊林氏は藤原兼信を祖とし、足利尊氏が篠村八幡宮で旗揚げしたきに駆けつけ、その軍功により、莊林の姓と家紋を賜ったといえます。現莊林氏の家の向かいの山に小山城があったといわれ、明智光秀の丹波攻めの際に落城したといわれています。

生身天満宮

生身天満宮は中世には天神社といわれ、小向山山麓に鎮座していました。小出吉親の園部城築城にともない、承応２年（１６５３）に現在地に再建されました。現鎮座地を美園町といいますが、美園町、栄町、小桜町は中世は園部村といいました。園部の地はもとは園部といい、菅原氏の代々の知行地であったといえます。小向山には菅原道真の邸宅があったといい、道真はたびたび邸宅を訪れ、政務の労をとったといわれています。道真は宇多天皇・醍醐天皇に仕え、従二位右大臣まで進



生身天満宮



武部源蔵社

んだが、左大臣藤原時平のざん奏にあい、延喜元年（901）1月九州太宰府に流された。藺部の代官であった武部源蔵は都の菅原邸へかけつけたが、

道真にあうことはできなかった。

すぐ後を追い、東寺で休憩中の道真に逢うことができたといひます。このときに道真は別れを惜しみ、形見として硯とともに「菅原のすりおく墨のいつまでもすすりの水のつきぬかぎりは」という歌を武部源蔵に与え、子息慶能の養育をたのんだという。源蔵は藺部へ帰り、小向山の邸宅内に道真の木像を彫り、小さな祠をたて、一日も早い帰洛を祈ったといひます。しかし、延喜3年3月25日太宰府で道真は世を去ったため、祠を霊廟として祀ったといひます。生身天満宮というのは道真在世中より生き祠として祀っていたことによります。天満宮は全国に12000社近くありますが、ここ生身天満宮はもっとも古い天満宮であるといひます。武部源蔵を祀った社が武部源蔵社であるといひます。

厳島神社



厳島神社はもと弁財天社といい、承和
12年（845）の創建という。小山
西町から栄町にかけてを私市（きさい
ち）といい、このあたりを支配してい
た長者が私設市を開き、倉を10もも
つほどの巨利をえるようになったの
で、この長者は「十倉長者」といわれ
るようになったという。ある日小向山
山麓東の方に荒廃した宮殿を見つけ
た。そこには天女が祀ってあったとい
う。いばらや雑草を刈り取り、池を掘
り、近江国竹生島から天女の尊像を迎
えて安置したという。私市「きさい
ち」とは敏達天皇6年10月に置か
れた私部「きさいちべ」からついた名
であるといわれ、のちに律令制が施行
されるようになると皇后領には屯倉
「みやけ」が設置されるようになりま
すが、園部の地にも屯倉がおかれ、こ
れの開発のために入植してきたのが任
那系渡来人であった私部「きさいち
べ」氏であったといえます。私部「き
さいちべ」といのは「后部きさきべ」
で古代皇后の屯倉開発のために入植し
た任那系渡来人をいいます。私部氏の
集団は6世紀ごろ園部に入植し、高等
な技術をもって開拓をし窯を作り、多
くの須恵器を焼いたといえます。小山
西町の山麓一帯には窯跡が多く存在
し、任那系渡来人であった私部氏の支
配層として、百済系渡来人大氏が渡来
し、采配をふるったといえます。「十
倉長者」というのは、この大氏の頭で
あったのではないかといわれています。